Japanese Association of Educational Psychology

Japanese Journal of Educational Psychology, 1992, 40, 37—46

パーソナリティの開放性—閉鎖性に関する研究

——精神健康性，創造性，自己意識との関係について——

西 川 隆 蔵*

A STUDY ON OPENNESS-CLOSEDNESS OF PERSONALITY

—— Relation to mental health, creativity and self-consciousness ——

Ryuzo NISHIKAWA

The purpose of this study is to clarify the meaning of openness and closedness of personality by reviewing studies on openness to experience (Rogers, 1959) and dogmatism (Rokeach, 1954), and to construct Experience Inventory (EI) for measuring an openness-closedness dimension. Thirty items of EI were selected on the basis of the pretest data. Five factors emerged as a result of the factor analysis (subjects were 740 university students, 114 junior college students and 202 high school students). Some examinations of EI test score proved that (a) EI had internal consistency and test-retest reliability and (b) the EI test score was not influenced by social desirability. Advocation of construct validity of EI was justified by (a) some significant relations between the EI test score and subscale score of mental health (self-actualizing) test, (b) some significant relations between the EI test score and subscale score of creativity test and (c) a piece of evidence that open-minded person had a high tendency of awareness and acceptance of the contradictory traits in him / herself.

Key words : openness to experience, dogmatism, mental health, creativity, self-consciousness.

問　　題

Rogers (1954, 1959) は十全に機能する人間 (fully functioning person)，建設的創造性 (constructive creativity) にみられる特徴として，経験への開放性 (openness to experience) という概念を提出している。彼によれば，経験への開放性とは現象学的な立場から問題にされる経験の世界 (world of experience) に対する十全な意識性 (awareness) を意味するものとされ，この概念の意味として次のような特徴があげられている (Rogers, 1954)。

(a)外界の事態や自己の内面に対する意識性や受容性，(b)柔軟性，(c)曖昧さに対する耐性。

彼の心理治療のプロセス・スケール (process scale) では，これらの諸特徴は治療者の受容的，共感的理解に基づく信頼関係の中で高められ，それとともに自分自身を評価の主体として経験するようになるとされている (Walker, Reblen, & Rogers, 1960)。Anderson (1959) のオープン・システム (Open system) 説では，この受容的，共感的な雰囲気をもつ集団の状況に対して開放性という概念が使われており，オープン・システムが個人を自己実現へと方向付ける集団の特徴であるとされている。

この開放性と対立する閉鎖性を意味する概念として，Rogers (1954) は防衛機制 (defence mechanism) をあげているが，Rokeach (1954) の独断主義 (dogmatism) の理論では，信念—非信念体系 (belif-disbelief system) を基

* 帝塚山学院大学 (Tezukayamagakuin University)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

本的な単位とした閉鎖性に関する構造論的な捉え方が示されている。彼は認知システムに影響を与える動機として，認知欲求と回避欲求に注目し，回避欲求が強くなるにつれて，認知欲求は低減し，信念体系と一致しない情報，すなわち非信念体系は拒否される傾向があると述べている(Rokeach, 1954)。そしてこの信念体系と非信念体系間の排他的で固定した状態を閉ざされた心 (closed mind) と呼び，これと対立する状態を開かれた心 (open mind) と呼んでいる (Rokeach, 1954)。また独断主義の概念はその研究の歴史的背景から，権威主義 (authoritarianism) の概念との一致点も多く (Rokeach, 1954 ; Dillehay, 1978)，これらの概念に示される閉鎖性の特徴として次のような事柄をあげることができる。

(a)硬さ (rigidity)，および変化に対する抵抗，(b)人間関係における他者に対する不寛容さや拒否的傾向，(c)権威への同調傾向，(d)曖昧さに対する耐性の欠如

閉鎖性に関するこれらの特徴の中でも，認知的な硬さや変化に対する抵抗，人間関係における不寛容さは，先の心理治療のプロセス・スケールの初期段階の特徴と符号するところも多く，先の関放性概念の柔軟性や受容性と対立する主要な特徴と言える。

Rogers (1959) と Rokeach (1954) の理論はその中核にある動機づけの内容をはじめとして行動理解の視点に違いはあるが，抑圧を基本とする防衛機制が発達や人間関係を阻害するパーソナリティの閉鎖性を意味するものと捉えている点に共通性が認められ，防衛機制を基本とした適応概念とは異なる人間主義的な行動理解の方向性が示されていると言える。同様の捉え方はFromm(1941)の意見にも認められ，権威主義が個人の無力感や孤独感からの逃避的自己防衛を意味するものとされている。

また開放性，閉鎖性概念は環境的規定性の強いパーソナリティ特徴を示すものであり，さらに人間関係における信頼感や自律性と関連すると考えられる。このことに関連する意見として，小口 (1980) は開放性，閉鎖性を社会性に関連する基本的な概念として捉えており，発達初期の基本的信頼感の獲得との関連性を指摘している。

ところで，Rogers(1959)の開放性概念が精神健康性の特徴であることは多くの研究者が指摘しており (Maslow, 1959 ; 上田, 1969 など)，Dellas & Gaier (1970) の創造性研究の概観では，創造性に関連する認知的特徴，あるいはパーソナリティ特徴として言及されている。特に Torrance(1979)は開放性を問題解決場面で認知的葛藤を性急に低減しようとせず，新しい情報を探索し，受容する傾向と捉えている。これと類似した捉え方は，Myers(1980)が Jung の類型論に基づいて記述している知覚(perceptive)タイプの特徴の中にも示されており，開放性が現実的，あるいは非現実的な事象に対する感受性を意味するものでもあることが示唆されている。その他，開放性を快適な覚醒水準を求めようとする刺激への接近傾向として捉えている研究もあり (Vessels, 1982)，認知的複雑性への好み (Barron, 1953) や Sensation seeking (Zuckerman, 1978) という特性とも一致するところが多い。

一方閉鎖性については，Rokeach (1960) の独断主義尺度の外部基準との関連妥当性を明らかにする研究等が数多く提出されており，Vacchiano, Strauss, & Hochman(1969)の概観研究では，独断主義が精神的未熟さ，不安の強さ，時間的展望の不安定さ，ステレオ・タイプ的思考傾向と関連することや MMPI の下位尺度と関連することが報告されている。また独断主義や権威主義傾向が創造的思考の阻害要因であることを実証的に検討した研究も報告されている (Leeb, 1975)。

さて以上の概観からは，さらに次のような点に今後の研究の方向性を見いだすことができる。

1. 開放性，閉鎖性は変化，生成の過程にある人間の状況的，現象的特徴を示すものであり，思考，感情，行動に反映される1つの全体的な方向性を示す概念として捉えることができる。また開放性と閉鎖性を両極とするパーソナリティ次元を仮定することができ，先に述べた開放性と閉鎖性に関する諸特徴を集約して捉えるならば，開放性の極には受容，接近，柔軟性という特徴があり，一方閉鎖性の極には拒否，逃避，硬さという特徴があると考えられる。すなわち接近，受容，柔軟性一逃避，拒否，硬さという対立関係を基本とするパーソナリティ次元が構成されるのである。

2. 開放性概念を操作的に規定し検討した研究は少なく (Coan, 1974 ; McCrae & Costa, 1982)，しかもこれらの尺度は開放性の側面の測定を意図して作成されたものであるだけに，これらの尺度を用いた研究で明らかにされた事実は対立する閉鎖性の側面に関する1つの傍証として考えることはできても，直接的資料としては捉えにくい。また Rokeach(1960)の独断主義尺度では高得点を閉鎖性，低得点を開放性とされるが，項目内容から考えて，この尺度が開放性の側面についての内容的妥当性を有しているとは言い難い。さらに開放性と閉鎖性の尺度を併用するとしても，これらの尺度の項目内容や因子分析結果 (Coan, 1972 ; Kerlinger & Rokeach, 1966 ; 篠置, 西川, 1980) からすると，それらの尺

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

度間に整合性があると考えられることは難しく，このような方法によって得られた結果の解釈は困難なものになると考えられる。したがって，開放性，閉鎖性に関する諸尺度を合成することにより，開放性と閉鎖性の両側面を操作的に規定でき，内的整合性を備えた尺度を作成する必要がある。

3．開放性は創造性や精神的健康性を規定する1つのパーソナリティ特徴と考えられるものであるが，自己実現の観点から規定される精神健康性と開放性との関連については，実証的な研究がほとんどなされていないのが現状である。したがって，このような精神健康性の諸側面を数量的に捉え，開放性—閉鎖性との関連を検討することが1つの課題であり，開放性—閉鎖性尺度と創造性，精神健康性との関連を確認できれば，開放性を創造性と精神健康性の接点を示す概念として位置づける1つの根拠を示す資料となるであろう。

4．Rogers (1959) の自己理論に基づけば，開放性—閉鎖性はパーソナリティの発達的変化や治療的変化の過程における自己概念や自己意識のあり方と密接な関連を持つ概念と考えられる。したがって，開放的な人間と閉鎖的な人間の自己概念，自己意識の特徴を数量的に明らかにし，その特徴が理論的にパーソナリティの発達的変化や治療的変化と対応することが確認されれば，開放性—閉鎖性尺度の妥当性を示す1つの資料となるであろう。

以上のような見地から，本研究ではパーソナリティの開放性—閉鎖性の測定尺度として，経験質問紙 (Experience Inventory, 以降 EI と略記) を作成するとともに，この EI によって操作的に規定される開放性—閉鎖性と創造性，精神健康性，自己意識との関連を検討することを目的とした。

方　　法

調査と結果処理は以下の段階に分けて行った。また調査は1988年から1991年にかけて各学校での講義，授業のクラス単位の集団で行った。

1．EI の予備テスト項目の作成。先に述べた開放性—閉鎖性の概念に基づき，開放性 (接近, 受容, 柔軟性)，閉鎖性 (逃避, 拒否, 硬さ) に関する具体的な行動や意識のあり方を表現すると思われる項目を主に Coan (1971) の開放性尺度や Rokeach (1960) の独断主義尺度，並びにパーソナリティの柔軟性，硬さ，曖昧さに対する耐性，権威主義に関する尺度から選択，翻案し (開放性 22 項目, 閉鎖性 23 項目)，さらに5項目を新たに作成，追加することによって計50項目からなる EI の予備テスト項目が作成された。回答形式は自記式3件法とし，回答は，はい2点，どちらでもない1点，いいえ0点(逆転項目の場合, はい0点, どちらでもない1点, いいえ2点) と得点化し，その合計をテスト得点とした。

2．EI の項目分析を行う。この分析結果に基づき，EI の最終項目を決定するとともに，EI テスト得点の分布の記述を行い，分布の正規性について検討した。被検者は兵庫県下のK大学の学生564名 (男子 244 名, 女子 320 名)，大阪府下のT女子大学の学生176名，M女子短期大学の学生114名，T高校の生徒202名(男子95名, 女子 107 名) である。また項目分析の結果選択された各項目の性質を検討するために EI の因子分析を行う。

3．EI の再検査信頼性について検討する。被検者はK大学の学生59名 (男子 27 名, 女子 32 名)，T女子大学の学生23名，M短大の学生28名である。

4．精神健康性との関連について検討する。精神健康性の測定については，粟津，野島，村山 (1977) が Personal orientation inventory : POI (Shostrom, 1964) を翻案し作成している自己実現スケール (Self actualizing scale : 以降, SAS と略記) を用いた。POI は自己実現の観点から精神健康性を測定するために作成され，2段階構成(2 大カテゴリーと 10 下位尺度)，150項目からなる質問紙であるが，SAS はこれらの尺度構成を改変することにより，9下位尺度と虚偽尺度からなっている(計 63 項目)。被検者はK大学の学生245名 (男子 115 名, 女子 130 名) とT女子大学の学生26名の計271名で，EI と SAS を実施し資料を得た。

5．創造性との関連について検討する。創造性の測定については，S-A 創造性検査A版 (創造性心理研究会, 1969, 以降, SACT と略記) を用いた。SACT は理科的領域の創造的素質の測定を目的としたものであり，3種類の下位検査課題の結果から，4つの創造的思考特性が測定される。被検者はK大学の学生82名 (男子 35 名, 女子 47 名) とT女子大学の学生26名の計108名で，EI と SACT を実施し資料を得た。SACT の採点は東京心理総合研究所に依頼した。

6．自己意識との関連について検討する。自己意識の測定については，Two sided personality scale (森, 1983 以降, TSPS と略記)，自己評価的意識調査項目 (梶田, 1980 以降 SE と略記) を用いた。TSPS は従来の SD 法における対語を単極性の形で対にして配列し (30 対)，対語の双方に対して，独立に評定させるものであり (Figure 1)，評定は全然あてはまらない (0 点) から，全くあてはまる (6 点) の7段階になっている。SE は自己評価の高低が測定される。被検者はK大学の学生82名(男子

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

35名, 女子47名), T女子大学の学生26名, M短大の学生31名の計139名で, EI, TSPS, SEを実施し資料を得た。

7. SASを実施したK大学とT女子大学の学生の資料を用いて, 社会的望ましさ (Social desirability) という反応バイアスがEIテスト得点に与える影響について検討する。

結果と考察

予備テストにおける項目分析 まずK大学, T女子大学, M短大, T高校の資料について各項目への回答傾向(3件法における選択率)を検討した。その結果, 4群に共通して, 中立回答(どちらでもない)の出現率が極端に低い(10%以下)項目やはい, いいえへ回答が偏ることにより(70%以上)得点の分散の小さい項目が計7個認められた。そこで信頼性が低いと考えられるこれら7項目を除く43項目において, 各項目得点とその項目を除いた42項目の得点合計との相関係数を求めた。その結果, 相関の値が小さく(0.2以下), テストの内的一貫性を低めていると思われる項目が8個認められた。次に43項目に対して主成分分析を行ったところ, 一般因子と考えられる第1主成分への寄与がこれら8項目において極端に低く, その他にも低い項目が5個認められた。そこで, これら13項目を除いて30項目の内的一貫性の程度をCronbachのα係数によって調べたところ, .81という値が得られた。TABLE 1は選択された30項目と各項目のテスト得点(当該項目の得点を除いたもの)との相関係数を示したものである。一般的にα係数値は.8以上が望ましいとされるが, 性格検査などでは.7程度の値しか得られない場合もあると言われている。このことからすれば, 30項目のα係数値は決して高い値とは言えないが, 十分実用に耐えられるだけの

TABLE 1 Item analysis of Experience Inventory $N=1055$

item		corrected item-total correlation[b]
1	自然や芸術に見とれてしまって, あたかも自分の意識が薄れてしまうように感じることがある。	.43
2	時々, 木が感情や態度を表現しているように思えることがある。	.41
3	今まで苦しんでいた問題の解決やアイディアなどが特別にはっきり現れることがある。	.39
4[a]	常々目新しい方法よりもよく熟達した方法で物事を行うのが好きです。	.33
5[a]	あまりに抽象的でわけの分からない芸術はまじめに考える気がしない。	.36
6	少しくらい驚くようなことであっても, 法律に触れることであっても, 新しく胸がわくわくするような経験をしてみたい。	.38
7[a]	メンバーの意見がバラバラであるようなグループは長続きするはずがない。	.28
8[a]	気ままで風変りな人と一緒にいると不愉快になる。	.41
9	完成したものより, 未完成のものに興味がひかれる。	.33
10	音楽を聴いたり, 芸術作品を見ていると体全体をゆるがす強い興奮を感じることがある。	.42
11	現代芸術の中でも不調和な色彩や不規則な形を美しいと思うことがある。	.44
12	漠然としているが, 意味がかくされているような絵画や文学が好きです。	.39
13	問題を解決する時は, たとえ非現実的で馬鹿げたことであってもあらゆる可能性を考えようとする。	.39
14[a]	スリルを味わうために危険なことをしたことは一度もない。	.35
15[a]	新しい未知の状況に自分からすすんで慣れたいとは思わない。	.35
16[a]	自分と意見が異なる人と議論するのは解決の道がないのでしたくありません。	.29
17	まるで夢でも見ているかのように自分自身を遠くからながめているかのような経験をしたことがある。	.39
18	決してやれないようなことをしている自分を想像することがある。	.38
19[a]	問題全体のアウト・ラインがハッキリしなければ, 複雑な問題には興味がない。	.33
20[a]	何かをする時にはいつも確実なものを好む。	.36
21	未解決の問題をぼんやり空想していることがある。	.42
22	時たま口に出して言えないようなことを考える。	.39
23	現実にはできそうもない素晴らしいことができたり, 特別な力を持っている空想をすることがある。	.37
24	他の人なら奇妙だとか, 不道徳だと思うようなことを考えてみるのが好きだ。	.51
25	人の集まっているところで, 何かショッキングなことをしてみたくなる。	.44
26[a]	議論は早く終らせたいと思うほうです。	.32
27	真面目にやらないといけない場面でも, 馬鹿げた滑稽(こっけい)なことを考えることがよくある。	.41
28	自分が人を殺すことなど現実にはできないが, 想像することはできる。	.35
29	何をするのか予想がつかず, 見ていてハラハラする人が好きです。	.43
30	理屈や観念をもてあそんで楽しむことがある。	.49

a) Reverse item.
b) Spearman correlation coefficient

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

内的一貫性を持つことを示すと考えられた。以上のことから，EIの50項目の内，これら30項目によって得られるテスト得点を以下の分析の対象とした。

EIテスト得点の平均値と得点分布 TABLE 2はK大学，T高校，T女子大，M短大のテスト得点の平均値と標準偏差を示したものである。なおT高校の男子のテスト得点の分布に極端に低い外れ値が1つ認められたので，このデータをT高校の資料から除外し，平均値を算出した。

TABLE 2 Means and SDs of EI test score

	Whole	Male	Female
K university	34.86	36.16	33.88
	(10.04)	(10.16)	(9.69)
T highschool	31.64	32.46	30.93
	(9.05)	(7.53)	(10.19)
T Women's College			31.37
			(9.69)
M Junior College			28.36
			(10.79)

The figures in parentheses show *SD*.

性差について検討したところ，K大学において有意差が認められた（$t=2.69$, $p<.01$）。次に男女別に群間差を検討したところ，K大学男子とT高校男子間に有意差が認められ（$t=3.63$, $p<.001$），女子ではK大学とM短大間に有意差が認められ（Scheffe test $p<.05$），相対的にM短大に閉鎖的な傾向を示す学生が多いと言える。

このような性差や群間差に反映される要因については，さらに調査対象を拡大しつつ検討する必要がある。特に性差に関する結果は，開放性—閉鎖性が環境的規定性の強いものであるという観点からみる時，興味深い示唆を与えるものであり，開放性—閉鎖性が性役割についての価値観や規範など社会文化的背景と密接に関連する要因を反映するパーソナリティ次元であることが示唆されている。

テスト得点分布の正規性をKolmogorov-Smirnovの検定法により検討したところ，K大学男女全体のテスト得点の分布を除く，他の群において正規性が確認された。しかし，K大学男女全体の得点分布も歪度，尖度に関する統計量はともに非常に低い負の値を示し（歪度−.27, 尖度−.23），分布はやや左に傾いてはいるものの，正規性からのずれは小さいことが確認できた。

因子分析 先に述べたようにEIは全体として比較的高い内的一貫性を示しており，一般因子の存在が示唆されてはいるが，各項目の性質を知るために因子分析を行った。まず便宜的に各群ごとに項目得点の平均値と標準偏差によって，項目得点を標準化し（z得点化），各群の結果を合成したうえで（計1055名），あらためて相関行列を求め，主因子法により5因子抽出後（Scree法），斜交回転（斜交Procrustes法）させるという方法を用いた。これは一般因子の存在が示唆されることや，因子間に無相関が仮定されない場合には斜交回転が適当であるとされているからである（芝, 1972）。その結果，次のような斜交因子が得られた（カッコ内は項目の番号）。

因子1「外的事象に対する感受性と受容性」（1, 2, 3, 5, 10, 11, 12, 13）

因子2「社会的常識や道徳性に束縛されない柔軟性」（24, 25, 27, 28, 29, 30）

因子3「非現実的な事象に対する接近性」（17, 18, 21, 22, 23）

因子4「異質さ，曖昧さに対する受容性，接近性と完結への抵抗」（7, 8, 9, 16, 19, 26）

因子5「変化や新しい経験に対する接近性」（4, 6, 14, 15, 20）

これらの因子に当初仮定した開放性—閉鎖性に関する主要な特徴（受容—拒否，接近—回避，柔軟性—硬さ）が反映されていると考えられた。男女別，群別の分析によってもほぼ同様の因子が認められた（M短大では他の3群とはやや異なる因子構造が認められた）。TABLE 3は1055名全体の資料にもとづいた各因子に対応する尺度の得点** 間の相関を示したものである。これによれば，因子3と因子4，因子3と因子5の相関の値は低いが，各因子は関連性を有していることが分かる。

以上の結果から，50項目の内30項目を最終項目として選択し，あらたに30項目のEIを作成した。

再検査信頼性 T女子大とM短大の学生計51名に1週間の間隔で，K大学の学生59名に3週間の間隔でEI

TABLE 3 Spearman correlation coefficients between 5 factors of EI ($N=1055$)

	Fac 1.	Fac 2.	Fac 3.	Fac 4.
Fac 2.	.39**			
Fac 3.	.38**	.43**		
Fac 4.	.33**	.22**	.13**	
Fac 5.	.23**	.38**	.15**	.37**

** $p<.01$

** カッコ内に示された項目の得点の合計を因子に対応する尺度の得点とした。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

を2度実施し，2時点におけるテスト得点の順位相関係数 (Spearman) を求めたところ，前者の場合において.828 (p<.01)，後者の場合.814 (p<.01) という値が得られた。この結果よりEIが高い安定性を有していると言える。

精神健康性との関連 271名の被検者の内，EIテスト得点が42点以上 (得点順位上位25%) の66名を開放性群 (Open)，28点以下 (得点順位下位25%) の62名を閉鎖性群 (Close) とした。TABLE 4 は(a) EIテスト得点とSAS下位尺度得点との順位相関係数 (Spearman)，(b)開放性群と閉鎖性群のSAS下位尺度得点平均値の比較を示したものである。相関の値は全般的に低いが，この結果からEIテスト得点は次のような傾向と関連すると言える。

社会的価値観や原理にとらわれず，状況に即して自分なりの価値観や原理に従って行動する傾向 (V)，自分自身の感情や欲求をあるがままに自由に表現できる自発性 (S)，自分自身の感情や欲求に対する感受性 (FR)，一見対立して感じられる対象をその本質を見極めることで統合して捉えられる統合的な意識性 (SY)，安らぎや暖かさのみならず厳しさを伴った深い意味のある人間関係を形成する能力 (C)，人間関係において必然的に生じると考えられる攻撃的感情を受容する傾向 (A)。

TABLE 4 Correlation between EI test score and SAS subscale[a] score, *Means* of SAS subscale score of Openness and Closedness group

correlation N=271	*Mean* (*SD*) Open N=66	Close N=62	t score
SAS V .18**	8.48(2.00)	7.66(1.91)	t=2.38**
S .18**	4.05(1.42)	3.44(1.64)	t=2.26*
SY .25**	3.85(0.92)	3.24(1.15)	t=3.30**
FR .21**	4.50(1.18)	3.74(1.25)	t=3.52**
TI .00	4.14(1.33)	4.00(1.36)	*N.S.*
C .21**	5.38(1.45)	4.63(1.62)	t=2.76**
SA .12	5.08(0.83)	4.85(0.92)	*N.S.*
SR .08	2.48(1.51)	2.31(1.54)	*N.S.*
A .14*	3.62(1.32)	3.05(1.34)	t=2.44*

a) V : Valuing, S : Spontaneity, SY : Synergy, FR : Feeling Reactivity, TI : Time Ratio, C : Capacity for Intimate Contact, SA : Self Acceptance, SR : Self Regard, A : Acceptance of Aggression.

* p<.05 ** p<.01

粟津，他 (1977) は高校生を対象にして，自己実現性が高いと評価された自己実現群，統制群，神経症群のSAS下位尺度の平均値を比較しているが，自己実現群はSAを除く下位尺度において，他の2群よりも高い平均値を示し，中でもFR, SYでは3群間に有意差が認められている (自己実現群＞統制群＞神経症群)。開放性群 (TABLE 3) とこの自己実現群の各下位尺度平均値を比較してみると，開放性群の平均値は自己実現群とほぼ同等か，それより高いものであった。SASの原版であるPOIに関する文献研究によると (Toci & Lindamood, 1975)，EIテスト得点と関連のみられた下位尺度の内，S，FR，SYは自己実現過程を反映する主要な尺度であることや，S，FR，SY，Cは心理治療過程を通して得点が上昇することが指摘されている。

以上のことから，EIによって操作的に規定される開放性—閉鎖性は精神健康性と関連することが示唆され，特にFR，SYとの関連はEIテスト得点が自己の感情や欲求，あるいは認知的葛藤に対する接近性を反映している点でEIの構成概念妥当性の一端を示すものと言える。その他S，V，Cと関連がみられたことは当初述べた開放性と自律性との関連を示唆する結果と言える。しかし自己の欠点や弱点に対する受容性 (SA)，自分の良い面を肯定的に受容できる自己肯定 (SR) との関連がほとんどみられなかったことはEIが自己の否定的，肯定的側面に対する受容性を反映していないことを示唆する結果とも考えられ，この点に関してEI項目の改良を行う余地があると言える。

創造性との関連 108名の被験者の内，EIテスト得点が42点以上 (得点順位上位25%) の22名を開放性群 (Open)，25点以下 (得点順位下位25%) の24名を閉鎖性群 (Close) とした。TABLE 5 は(a) EIテスト得点とSACT下位尺度得点との順位相関係数 (Spearman)，(b)開放性群と閉鎖性群のSACT下位尺度得点平均値の比較を示したものである。相関の値は全般的に低いが，この結果からEIテスト得点は生産力 (Tb：装置考案課題)，流暢性 (F)，柔軟性 (X) と関連することが認められ，特に柔軟性との正の有意な相関はEIの構成概念妥当性の一端を示すものである。また思考特性の中でも流暢性と柔軟性とに関連がみられたことは，EIによって操作的に規定される開放性—閉鎖性が拡散的な思考 (divergent thinking) 態度を反映するものであるように思われる。

自己意識との関連 TSPSの結果については，森の方法に従い，対にした尺度の評定間の差 (S^-) の絶対値の総計であるSum S^-と，各対の尺度の評定の合計

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 5 Correlation between EI test score and SACT subscale[a] score, *Means* of SACT subscale score of Openness and Closedness group

correlation $N=108$	*Mean* (*SD*) Open $N=22$	Close $N=24$	t score
SACT TA .23*	11.13(4.42)	9.25(3.63)	*N.S.*
TB .29**	12.00(3.41)	9.17(2.81)	$t=3.08$**
TC .15	15.36(4.24)	14.13(3.75)	*N.S.*
F .22*	32.50(8.19)	28.04(6.53)	$t=2.02$*
X .23*	23.95(4.37)	21.33(3.81)	$t=2.17$*
O .25*	6.50(2.99)	5.08(2.54)	*N.S.*
E .21*	32.00(8.23)	28.04(6.73)	*N.S.*

a) TA : Unusual Use activity, TB : Product Improvement activity, TC : Guess Consequences activity, F : Fluency, X : Flexibility, O : Originality, E : Elaboration

* $p<.05$ ** $p<.01$

(S⁺) の総計である SumS⁺を算出した。Sum S⁻が小さく，Sum S⁺が大きい場合性格の2面性を示すことになり，Sum S⁺の大きいことが適応性を示すことになるとされている（森, 1983）。TSPS の Sum S⁻，Sum S⁺，SE 得点間の順位相関係数（Spearman）を求めてみると，Sum S⁺と SE 得点との間に有意な正の相関が認められた（$r=.28$ $p<.001$）。これは Sum S⁺の高さが肯定的な自己評価と関連するという意味で，Sum S⁺の併存的妥当性を示唆する結果と言える。

139名の被検者の内，EI（30項目版）テスト得点が43点以上（得点順位上位25%）の34名を開放性群（Open），20点以下（得点順位下位25%）の35名を閉鎖性群（Close）として，両群における TSPS の Sum S⁻，Sum S⁺，SE 得点の平均値とこれらの得点間の順位相関係数（Spearman）を示したのが TABLE 6 である。

SE 得点と Sum S⁺に両群間の有意差が認められ（Sum S⁺：$t=2.77$, $p<.05$, SE 得点：$t=-3.48$, $p<.001$），開放性群は閉鎖性群よりも Sum S⁺は高いが，SE 得点については閉鎖性群の方が開放性群よりも高いことが認められた。

次に Sum S⁺と SE 得点の関係については両群において正の有意な相関が認められた。Sum S⁻と SE 得点については開放性群では負の有意な相関が認められたのに対して，閉鎖性群では有意な相関は認められなかった。さらに Sum S⁺と Sum S⁻については，開放性群では負の有意な相関があることが認められたのに対して，閉鎖性群では有意な相関は認められなかった。そこで両群の相関係数の差が有意なものであるかどうかを信頼限界法（岩原信九郎, 1957）により検定した。その結果，Sum S⁻と SE 得点，Sum S⁺と Sum S⁻については両群の相関係数の信頼限界の上限値は重ならず，有意な差のあることが認められた（Sum S⁻と SE 得点：開放性群の上限値.43, 下限値−.56, 閉鎖性群の上限値.86, 下限値−1.09, Sum S⁺と SE 得点：開放性群の上限値.85, 下限値−.03, 閉鎖性群の上限値.81, 下限値−.09, Sum S⁺と Sum S⁻：開放性群の上限値.09, 下限値−.82, 閉鎖性群の上限値.55, 下限値−.44）。

この結果は，開放性群では S⁺が高くなれば，S⁻が低くなるという傾向のあることを示唆しているように思われる。すなわち。FIG. 1 の評定 pattern-A と pattern-B ではどちらも S⁻の値は等しく低いが，開放性群では S⁺が高い場合，pattern-A の傾向を持つと言える。

開放性群，閉鎖性群という開放性の水準を要因1，Sum S⁻の得点の水準を要因2として，Sum S⁺の得点への効果を分散分析によって検討した結果（TABLE 7），要因1の主効果（$F=10.27$ $df=1,63$ $p<.005$）と2要因の交互作用が認められた（$F=4.67$ $df=2,63$ $p<.05$）。開放性群，閉鎖性群別に条件差を検定したところ，開放性群

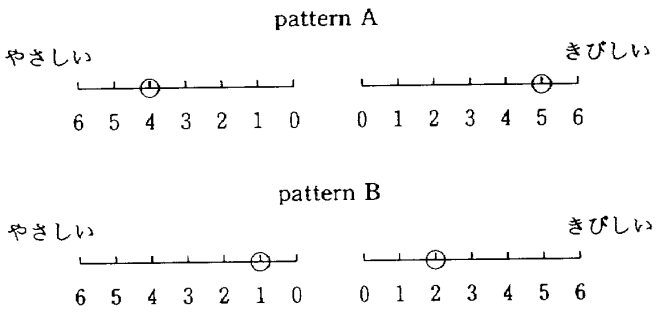

FIG. 1 TSPS's item example and answer pattern.

TABLE 6 *Means* and correlations of SE score, Sum S⁺, Sum S⁻ of Openness and Closedness group

		Mean (*SD*) Sum S⁺	Sum S⁻	SE score	Sum S⁺ ×Sum S⁻	Sum S⁺ ×SE	Sum S⁻ ×SE
Open	$N=34$	221.00(34.31)	53.53(18.50)	12.03(4.24)	$r=-.49$**	$r=.55$**	$r=-.35$*
Close	$N=35$	202.54(18.53)	47.34(15.90)	16.00(5.18)	$r=.08$	$r=.48$**	$r=-.09$

* $p<.05$ ** $p<.01$

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 7 *Means* (*SD*) of Sum S^+ score for three classes[a] classified according to Sum S^- score in Openness and Closedness group

	Sum s^-		
	low	middle	high
open	247.44	213.75	207.44
	(39.75)	(27.34)	(27.87)
	$N=9$	$N=16$	$N=9$
close	194.71	208.24	198.73
	(13.20)	(15.42)	(23.85)
	$N=7$	$N=17$	$N=11$

a) low : Sum $S^-=<40$ middle : $41<=$ Sum $S^-=<62$ high : Sum $S^-=>63$

では条件差が認められ（$F=4.53$ $df=2.31$ $p<.05$）また Sum S^-の Low 条件では，群間差が認められた（$F=11.54$ $df=1.18$ $p<.01$）。

さて TSPS の各対の形容詞は共に望ましい意味を持つことと，概念的反対性の点から一応の基準をもって選択されているが，その中には一人の人間に共存しやすい対（共存性項目）と共存しにくい対（対立性項目）の両者が含まれている（森, 1983）。そこで139名の評定における対間の順位相関係数（Spearman）を求めると19個の対において負の有意な相関が認められたが，両群別に対間の相関係数を算出すると，開放性群では7個，閉鎖性群では11個の有意な負の相関が認められた。そこでこれらの対の内，どちらかの群にのみ負の有意な相関が認められた16個の対について，両群の相関係数間の差を先の信頼限界法で検定した。その結果，14個の対において有意差が認められ，その内5個は開放性群で有意な負の相関が認められる対であり，9個は閉鎖性群で有意な負の相関が認められる対であった。この結果は閉鎖性群の方が開放性群よりも各対を対立性項目として捉える傾向が強いことを示唆するものと考えられる。

以上の結果を総合すると，自己評価（SE 得点）については閉鎖性群の方が開放性群よりも肯定的に評価していると言えるが，その評価意識の構造に関しては，開放性群の方が閉鎖性群よりも自己の中の対立的な諸特性を共存的に意識化する傾向が高く，たとえ対立する特性であっても自分の性格の2面性としてそれらを受容していることがうかがわれる。これは先の SAS の統合性（SY）と EI テスト得点との関連（TABLE 4）をさらに明確にする事実であり，自己受容性に関して，EI の構成概念妥当性の一端を示すものと言える。自己の中の対立する特性を受容し統合化をはかるところに精神健康性や創造性の1つの基本的な特徴があることは多くの研究者によって指摘されており（Maslow, 1959；上田, 1969；Torrance, 1962），また同一性達成には一体性（unitedness）と分離性（separativeness）という自我指向性の二律背反的な2側面の統合がみられることを示唆する実証的な研究結果も報告されている（山本, 1988）。これらの指摘や研究結果に基づけば，以上の結果は開放性をパーソナリティの統合化に関与する要因として位置づける1つの根拠を与えるものであると言えよう。

社会的望ましさとの関係 SAS を実施した271名の学生の資料に基づいて，SAS の虚偽尺度と EI テスト得点との順位相関係数（Spearman）を調べたところ，$r=.11$（*N.S.*）という値が得られた。EI には非現実的，非社会的側面に関する項目が多く含まれているため，社会的望ましさによる反応歪曲を受けやすいという問題が予想されたが，この結果からは反応歪曲があっても妥当性の基礎となる開放性—閉鎖性の因子の分散は残存していると考えられた。

要約と今後の検討課題

1. 本研究で作成した30項目の EI が比較的高い内的一貫性を持ち，安定した信頼性を備えていることは，項目分析，再検査信頼性の検討の結果明らかである。またテスト得点の分布は正規分布に近似することが認められた。さらに社会的望ましさによってバイアスを受けることがないことが確認できた。以上のことは EI によって操作的に規定された開放性—閉鎖性次元が安定した個人差に関わる変数であることを示唆している。

2. 因子分析の結果，5因子が抽出され，30項目の特徴が明らかになり，これらの因子の特徴から，EI 高得点には接近，受容，柔軟性，低得点には逃避，拒否，硬さという当初仮定した傾向が反映されていると考えられた。

3. 開放性が自己実現の観点から規定される精神健康性，創造性と関連することが明らかになった。この結果は開放性を精神健康性と創造性の接点を示す概念として位置づける1つの根拠を与えるものであろう。しかし，これらの関連が同一被験者においても認められるかどうか検証し，理論的にこれらの関連を明確にしていくことが緊急の課題である。創造性との関連については，芸術や社会的領域にも範囲を広げて検討する必要がある。また精神健康性に関する外部基準として用いた SAS は一応信頼性，妥当性の検証がなされているが（粟津, 他, 1977），十分であるとは言えない。本邦

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

では自己実現の観点から規定される精神健康性尺度はSAS以外にみられないのが現状であるが，今後この種の測定尺度の作成，標準化も重要な課題と言える。

4.開放的な人間は自己の中の対立する特性を意識化し共存的に受容する傾向を持つことが明らかになった。この結果は開放性をパーソナリティの統合化に関する要因として位置づけていくうえで少なからぬ価値を持つものと言えるが，今後これらの関連の検討と精緻化を進めていくことが必要であることは言うまでもない。またパーソナリティの統合性については，自我や自己についての総体的なパーソナリティ概念に注目し，その概念の下位カテゴリーや段階を操作的に規定していくのが1つの有効な方法であろう。たとえばMarcia (1967) による同一性地位 (identity status) 類型概念やLoevinger (1966) の自我発達理論はこの種の基本的なストラテジーを示すものであり，既に自我同一性地位面接やLoevinger (1966) の自我発達尺度によって測定された自我発達レベルと開放性との関連を検討した研究も報告されている (McCrae & Costa, 1980 : 高橋, 1991)。

引用文献

Anderson, H.H. 1959 Creativity as personality development. In H.H. Anderson (Ed.), *Creativity and its cultivation*. New York : Harper & Raw. Pp. 119—141.

粟津幹子・野島一彦・村山正治 1977 自己実現スケールの作成 九州大学教育学部 教育相談室紀要, **3**, 117—130.

Barron, F. 1953 Complexity-simplicity as a personality dimension. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **48**, 163—172.

Coan, R.W. 1974 *The optimal personality*. New York : Columbia University Press.

Dellas, M., & Gaier, E.L. 1970 Identification of creativity. *Psychological Bulletin*. **73**, 55—73.

Dillehay, R.C. 1978 Authoritarianism. In J.E. Exner, Jr (Ed.), *Dimensions of Personality*. New York : John Wiley & Sons. Pp. 85—127.

フロム, E. 日高六郎 (訳) 1985 自由からの逃走 東京創元社 (Fromm, E. 1941 *Escape from freedom*. New York : Reinhart & Company.)

岩原信九郎 1957 教育と心理のための推計学 日本文化科学社

梶田叡一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会

Kerlinger, F., & Rokeach, M. 1966 The factorial nature of the F and D scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 391—399.

Leeb, S. 1975 Empirical application of a cognitive framework to rigidity, aspects of creativity, anxiety and adjustment. *Psychological Report*, **37**, 651—658.

Loevinger, J. 1966 The meaning and measurement of ego development, *American Psychologist*, **21**, 195—206.

McCrae, R.R., & Costa, P.T. 1980 Openness to Experience and Ego Level in Loevinger's Sentence Completion Test : Dispositional Contributions to Developmental Models of Personality, *Journal of Personality*, **39**, 1179—1190.

McCrae, R.R., & Costa, P.T. 1985 Openness to experience. In R. Hogan & W.J. Jones (Ed.), *Perspectives in personality* Vol. 1. London : JAI Press Inc. Pp. 145—172.

Marcia, J.E. 1967 Ego identity status : Relationship to Change in Self-esteem, "General Maladjustment", and Authoritarianism. *Journal of Personality*, **35**, 119—133.

Maslow, A.H. 1959 Creativity in self actualizing people. In H. Anderson (Ed.), *Creativity and its cultivation*. New York : Harper & Raw. Pp. 83—95.

森 知子 1983 質問紙による人格の二面性測定の試み 心理学研究, **54**, 182—188.

マイヤーズ, I.B. 大沢武志・木村武一 (訳) 1982 人間のタイプと適性 日本リクルートセンター (Myers, I.B. 1980 *Gifts differing*. Palo alto : Consulting Psychologists Press Inc.)

小口忠彦 1980 人間の心理構造 産業能率大学出版部

Rogers, C.R. 1954 Toward a theory of creativity. A Review of General semantics, Summer, 11, 249—260. Reprinted in H.H. Anderson (Ed.), *Creativity and its cultivation*. New York : Harper & Raw. 1959 Pp. 69—82.

ロジャース, C.R. 伊東 博 (編訳) 1967 クライエント中心療法の立場から発展したセラピィ，パースナリティおよび対人関係の理論 ロジャーズ全集 第8巻 第5章 岩崎学術出版 (Rogers, C. R. 1959 A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

client-centered framework. In S. Koch (Ed.), *Psychology : A Study of a Science*, Vol, 3. *Formulation of the Person and the Social Context*. New York : McGraw-Hill, 1959 Pp. 184—256.)

Rokeach, M. 1954 The nature and meaning of dogmatism. *Psychological Review*, **61**, 194—204.

Rokeach, M. 1960 *The open and closed mind*. New York : Basic Books.

篠置昭男・西川隆蔵 1980 開放性の創造性心理学的研究 関西学院大学創立90周年文学部記念論文集, 42—65.

Shostrom, E. 1964 An inventory for the measurement of self-actualization. *Educational and Psychological Measurement*, **24**, 207—218.

芝 祐順 1972 因子分析法 東京大学出版会

創造性心理研究会（編） 1969 S-A創造性検査手引 東京心理株式会社

高橋裕行 1991 体験への開放性と同一性，親密性の発達 福井大学教育学部紀要 第IV部 教育科学（その2), **41**, 155—173.

Toci, D.J., & Lindamood, C.A. 1975 The measurement of self actualization : A critical review of the Personal Orientation Inventory. *Journal of Personality Assessment*, **39**, 215—224.

トーランス, E.P. 佐藤三郎・中島 保(訳) 1981 創造性修業学—ゆさぶり起こせねむっている創造性 東京心理（Torrance, E.P. 1979 *The search for SATORI and creativity*. New York : Creative Education Foundation, Inc.)

トーランス, E.P. 佐藤三郎（訳） 1966 創造性の教育 誠信書房（Torrance, E.P. 1962 *Guiding creative talent*. Englewood : Prentice-Hall.)

上田吉一 1969 精神的に健康な人間 川島書店

Vacchiano, R.B., Strauss, P.S., & Hochman, L. 1969 The open and closed mind : A review of dogmatism. *Psychological Bulletin*, **71**, 261—273.

Vessels, G. 1982 The creative process : An open-system conceptualization. *Journal of Creative Behavior*, **16**, 185—196.

Walker, A.M., Reblen, R.A., & Rogers, C.R. 1960 Development of a scale to measure process changes in psychotherapy. *Journal of Clinical Psychology*, **1**, 79—85.

山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究—自我の2指向性の観点から—教育心理学研究, **36**, 238—248.

Zuckerman, M. 1978 Sensation seeking. In J.E. Exner, Jr (Ed.), *Dimensions of Personality*. New York : John Wiley & Sons. Pp. 487—559.

付 記

本論文の一部は日本心理学会第54回大会で発表した資料に，新たな調査結果を加えまとめたものである。

本論文作成にあたり，関西学院大学文学部 篠置昭男教授に御助言をいただきました。記して謝意を表します。

(1991年7月1日受稿)

NII-Electronic Library Service